

27年度版教科書つれづれ 13 「一つの花」(光村図書・小学4年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「一つの花」(今西祐行)は、光村図書・教育出版の小学4年(上)に収録されている物語である。東京書籍では、同じく小学4年(上)に読書教材として収録されている。その意味では、この三社の教科書の中では、準共通教材といってよいだろう。

ここではまず、光村図書の教科書での違いを考えていく。といっても、教材本文に変更があるわけではない。では、どこが変わったのだろうか。

まず、レイアウトである。同じ挿し絵が、ほぼ同じ位置に、ほぼ同じ大きさで掲載されている。しかし、23年版(以下旧版)では、教材本文は11ページにわたって収められていた。それが27年版(以下新版)では10ページになり、1ページ少なくなっている。その結果、「それから、十年の年月がすぎました。」で始まる最後の場面が、旧版では3ページにわたっていたのだが、新版ではきれいに見開き2ページに収められている。一つの場面が、ひと目で見わたせるレイアウトは、細かいことだが子どもたちにとって見やすくなったといえる。

次いで、学習の手引きの変更に触れる。

旧版の手引きは、次のように課題が設定されていた。

読んだ物語をしょうかいしよう

新版は、次のようになっている。

場面の様子に着目して読み、しょうかいしよう

どちらも物語の紹介という点では同じであり、そこで書かれていることにも共通することが多いのだが、異なっている点もある。

旧版の手引きは次のように始まっていた。

北野さんは、「一つの花」を読んで、初めに、次のような感想をもちました。

「一つだけ」という言葉が何度も出てきて、強く心にのこりました。

みなさんは、どうですか。「一つだけ」という言葉に着目して、物語をくわしく読んでみましょう。そして、「一つの花」をだれかにしょうかいしましょう。

「一つだけ」という言葉の繰り返しに、まず目を向けさせているのである。

ところが新版では次のように始まる。

「一つの花」を、場面のうつりかわりや、登場人物の行動や会話などに気をつけて読みましょう。そして、心にのこった言葉や作品のとくちょう、自分の感想などから選んで、読んだことがない人にも分かるようにしょうかいしましょう。

「一つだけ」という言葉に限っても、本文の中で17回用いられている(「一つ」や「一つだって」を加えるとさらに増えるが)。旧版は、まずそこに着目させた上で、物語の設定や人物の行動や会話などに目を向けていく。ところが、新版は「場面や登場人物の気持ちに気をつけて読もう」と一般的な指示から入っている。

旧版では、その中で次のような手引きを出している。

▼最後の場面に、「一つだけ」という言葉が出てこないのはなぜだと思いますか。戦争中と戦争後の場面をくらべて考えましょう。

新版でも手引きの終わりの方で次のように述べている。

▼「一つだけ」という言葉は、最後の場面には出てきません。次のことに気をつけて、戦争中と戦争後の場面をくらべ、「一つだけ」という言葉が出てこないわけを考えてみましょう。

・コスモスの花 ・食べ物 ・登場人物

「一つだけ」という言葉にこだわることは評価できる。ただ旧版も新版もそれを「戦争中と戦争後の場面をくらべ」て考えさせようとする。しかし、そのような比較は、

戦争中……食べ物は十分でない 大変な生活

戦争後……食べ物が豊かになった 幸せな生活

といった安易な比較につながっていかないだろうか。戦争教材を扱う場合、戦争中の物資の不足や生活の大変さ、家族が戦争によって奪われる悲惨さなどを今の時代と比べて、だから戦争はよくない・平和を大切にしなければならぬといった教え方がしばしばなされる。それがさも平和教育であるかのような錯覚すら存在する。

しかし、私は国語科で扱う以上、平和教育が第一義にされるべきではないと考えている。国語の授業では、何よりも言葉を読むことが教えられなくてはならないし、作品の表現に目を向けることが大事にされるべきだと考えている。

「一つの花」においても、戦争中と戦争後を安易に比較するのではなく、「一つだけ」という言葉の繰り返しの意味が読まれなくてはならない。

「一つだけ」という言葉は、この作品においてどのように用いられているか見てみよう。ゆみ子のお父さんは、「一つだけ」に関わって「深いため息をついて」次のように言う。

「この子は、一生、みんなちょうだい、山ほどちょうだいと言って、両手を出すことを知らずにすごすかもしれないね。一つだけのいも、一つだけのにぎりめし、一つだけのかぼちゃのにつけ——。みんな一つだけ。一つだけのよろこびさ。いや、よろこびなんて、一つだってもらえないかもしれないだね。いったい、大きくなって、どんな子に育つだろう。」

この父の言葉は、「一つだけ」という言葉が、作品の中で否定的な意味合いで用いられていることをよく語っている。

ところが、クライマックスの「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう——。」では、「一つだけ」は否定的には語られていない。それまで「一つだけ」を否定的に捉えていたお父さんが、最後の最後でゆみ子に向かって「一つだけ」と語っているのである。みじめだったらしい否定的な言葉であった「一つだけ」が、ここでは「一つしかない」大切な、かけがえのないものという肯定的な意味に転換しているのである。繰り返し出てくる言葉が、最後においてその意味を逆転させていくところに、この作品の面白さ・魅力があるといえる。

そのように考えると、旧版の手引の方がまだ、そこに目を向けさせる可能性があったのではないだろうか。新版で一般的な手引きになってしまったことで、かえって焦点がボケてしまったように私には思える。

最後に、手引きの終わりに「特別な言葉に着目する」という枠組みで、次のように述べられてい

る箇所がある。

特別な言葉に着目する

物語の中で、作者がある言葉に特別な意味をこめていることがあります。そのような言葉は、例えば、次のような使われ方をします。

- 題名に用いられる。
- くり返し用いられる。
- 中心となる登場人物の会話の中で用いられる。
- 出来事が起こったり解決したり、登場人物の気持ちが変わったりする、重要な場面で用いられる。

言っていることは悪くはないのだが、「特別な言葉」をどうやって見つけるのか、どのようにしたら「特別な言葉」に着目できるかが、ポイントになるはずである。子どもたちが、その言葉の「特別な言葉」さがわかることが大事なのだ。「中心となる登場人物の会話の中で用いられる」どの言葉が「特別な言葉」なのか。「出来事が起こったり解決したり、登場人物の気持ちが変わったりする、重要な場面で用いられる」言葉から、どうやったら「特別な言葉」を見つけ出せるのか。どの言葉、どの表現に着目して物語を読んでいけばよいのかといったことが、この枠組みでは教えられなくてはならない。

その意味では「特別な言葉」という表現も、何を持って「特別な言葉」というのが、まったくわからない。ここでは「題名やくり返し用いられる言葉に着目する」とした方が、シンプルであり、なおかつこれから子どもたちが文学作品を読んでいく上で（このセオリーは説明的文章においても有効であるが）役に立つのではないだろうか。